

近代日本人は外国で何を見たのか？

事典 日本人の見た外国

富田仁編 A5・510頁
定価(本体9333円+税) ISBN9784816920561
2008年1月刊行

「木戸孝允日記」、「南極探検」、「ロシア印象記」など 江戸時代～昭和戦前期の海外見聞記377点を解説

江戸時代から昭和戦前期までに書かれた、日本人の海外見聞記を多角的に解説した事典です。

江戸時代の漂流記、幕末の使節団の記録、作家・芸術家の紀行・日記・渡欧詩集など377点について、著作の成立背景、著者の経歴、内容紹介、書誌事項などを詳しく紹介。

「国別索引」「書名索引」「著者名索引」「事項名索引」付き。

収録文献例(著者、渡航先・年)

- 【江戸時代の漂流記】
 - 「北槎聞略」 大黒屋光太夫/ロシア漂流民 ロシア(1783～1792)
 - 「漂異紀略」 中浜万次郎/漂流民、のち英学者 アメリカ(1841～1851)
- 【幕末維新の使節団】
 - 「二夜語」 加藤素毛/使節団に同行した俳人 アメリカ、ハワイ(1860)
 - 「万延元年アメリカハワイ見聞報告書」 福沢諭吉/思想家 アメリカ、ハワイ(1860)
 - 「航西日記」 渋沢栄一、杉浦讓/幕臣 幕末最後の使節団 フランス、スイスほか(1867)
- 【明治時代】
 - 「独逸日記」 森鷗外/小説家 『舞姫』につながる留学 ドイツ(1884～1888)
 - 「黒田清輝日記」 黒田清輝/日本の西洋画を切り開いた洋画家 フランス(1884～1893)
 - 「米国通信」 清沢別/ジャーナリスト 若き日の米国体験 アメリカ合衆国(1907)
 - 「フランスから帰つて」 高村光太郎/詩人 フランス(1910)
- 【大正時代】
 - 「祖国を顧みて」 河上肇/経済学者 ベルギー、フランスほか(1914)
 - 「東西相触れて」 新渡戸稲造/教育者 イギリス、フランスほか(1920～1926)
 - 「巴里の横顔」 藤田嗣治/パリに生きた画家 フランス(1920年代)
- 【昭和戦前期】
 - 「欧米歌舞伎紀行」 市村羽左衛門(15代目)/歌舞伎役者 アメリカ、フランス、イギリス(1928)
 - 「世界に摘む花」 岡本かの子/歌人 フランス、イギリスほか(1930～1932)
 - 「世界を私の家として」 賀川豊彦/キリスト教社会運動家 アメリカほか(1934～1935)
 - 「渡仏日記」 高浜虚子/俳人、小説家 フランスほか(1936)
 - ……など377点

好評既刊

16世紀から明治期までの2,102人
新訂増補 海を越えた日本人名事典
富田仁編
A5・940頁 定価(本体15,000円+税) ISBN4-8169-1933-3 2005.7刊


編者プロフィール 富田 仁 とみた・ひとし

昭和8年東京生。元日本大学教授。日本仏学史学会会長。日本フランス語フランス文学会・日本ペンクラブ所属。「舶来事物起源事典」(名著普及会)、「岩倉使節団のつり」(翰林書房)など、著編書多数。

2017.3

お問い合わせは… 日外アソシエーツ 営業局

TEL.03-3763-5241(代) FAX.03-3764-0845
〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16 <http://www.nichigai.co.jp/>

■貴店名	注文書	事典 日本人の見た外国 定価(本体9,333円+税) ISBN978-4-8169-2056-1	冊
		■お名前	冊
		 9784816920561	

田辺 太一

幕末外交談 (ばくまつがいこうだん)

【対象国】フランス(1864,1867,1871)、ベルギー、オランダ、スイス、イタリア、イギリス(1871)

【著者】田辺 太一 たなべ たいち 天保2年9月16日(1831)~大正4年9月16日(1915)。幕臣、外交官。出生地未詳。幼名定輔。蓮舟と号す。昌平黉教授出役で甲府徴典館の学頭であった儒学者田辺石庵の二男。太一も昌平黉で儒学を学び、甲府徴典館の教授となる。安政6年(1859)、外国奉行支配下の書物方出役となり横浜開港に関する議案の浄書、対話の筆記を担当。文久3年(1863)横浜鎮港談判使節池田長発に随行し渡仏、慶応3年(1867)徳川昭武遣欧使節の随員としてパリ博覧会に出席。明治維新後、外務少丞となり、明治4年(1871)岩倉遣外使節団に書記官長として随行。14年(1881)清国臨時代理公使。その後元老院議員などを歴任した。

【背景】太一が外国方の仕事を始めたのは、異国船打払い令、モリソン号砲撃事件、蛮社の獄、ペリー来航、安政五か国条商条約の締結、神奈川・長崎・箱館の渦中にあった時期であった。こうした頭として渡仏、また徳川昭武のパリ万の書記官長として随行するなど、国運もって日本の外交を深慮することとな

【内容】本書の記述は、ペリー来航時の勘定奉行小栗上野介の外交路線をなり、3度遣外使節団に随行し、国際事ばさみとなって苦慮した外交当事者とれてつぶさに語られている。類書に見的な印象が記されていないのも、本書経験に基づいて記された幕末の稀有な往事談」とともに貴重な証言であり、国の代表として対外折衝の困難を身を府の外交政策を批判した峻烈な評論である、「安政以来慶応の末年にいたるのを見て、予は断乎として言いたい。を奉じて鎮攘をはかり、それを逃げ得一訳」という述懐によく表われている。

【文献】幕末外交談/田辺太一(蓮舟)著 田辺太一著 / 坂田精一訳校注 平凡社 東京大学出版会(続日本史籍協会叢書)